

アトモスフィア

フォーティナーナイズの末裔

笠井 献一*

東大教養学部から進学したい専門学部を選ぶとき、理学部に新設される生物化学科に行きたいと言ったら、「学科の名前に生物なんてついていたら、役に立たない勉強をしてきた奴と思われるから、卒業しても就職口なんかないぞ」と同級生達からさんざんおどかさされた。もちろんそれは覚悟の上で進学したのだが、まさか生物がついた学科や学部の方が就職しやすい時代が来るなんて、あの頃は夢にも思わなかった。生化学をやっていますと言うと、「生け花の勉強ですか?」と聞かれるくらいならまだしも、「へえ、性の科学をやっているんですか」とニヤニヤされたりしてくさったものである。

でも今となれば、生化学の研究者をやってこられて最高に幸せだった。その理由はいくつもあるが、最大のひとつは、いちばん上等の人類とだけつき合っただけでこられたことである。先生も、先輩も、同輩も、後輩も、研究者仲間も、みんな人類の知的財産を積み重ねることを喜びとする最上級の人達だった。「金儲けこそ人生の目的」などという下品な人類とはまったくつき合わずにすんだ。生化学が金に縁がなかった時代には、別世界の住民だったから。

でもそれも今は昔。もはや私が性科学者と誤解されることはないが、金鉱を求める大群がこの世界に押し寄せてきたことはうれしくない。研究を金儲けの手段にしようという卑しい人間が大きな顔をするようになり、不愉快ですめばまだしも、真面目な研究者に被害まで出ている。それを痛感させられたのが、将来ある若い日本の研究者が、アメリカでスパイ扱いされ告発される事件が続発したことである。

さすがアメリカは49mersを生んだ国だけあり、その土壤が今も残っている。19世紀半ばに勃発したゴールドラッシュ。一攫千金をねらう連中が西部に大挙押し寄せた。有望な金鉱採掘場を買い占めた経営者は、少しでも多く儲けようと雇い人を搾取しつくした。雇い人が砂金の一粒でも持ち出そうものなら、袋叩きにしたり、保安官に逮捕させたという。昨今の研究スパイ問題とそっくりではないか。

現代の銭ゲバ研究室では、ボスはあの手この手で資金をかき集め、使い捨てのポストドクをこき使って、儲かるデータを出させる。成果を人類共有の知的財産とするなど論外で、特許権をひとり占めして更に資金を集め、ひたすら儲けの拡大に驀進する。発見の喜びなどとは無縁で、大金持ちを目指すことこそ生き甲斐。自分の儲けの邪魔になるやめた雇い人などは犯罪者でしかなく、当局に告発してなんら良心が痛まない。

スパイ扱いされた人達は、まさかこんな種類人間がサイエンスをやっているなどとはつゆ知らず雇われたのだろう。こうしたボスは多額の資金をかき集めているから、提示された研究条件や待遇が破格に良く見えたのかも知れない。論文も派手に乱発していて、活動的な研究室に見えたことだろう。でもそこに研究者の魂なんてありはしなかった。

日本のマスコミの対応にもあきれはてた。犯罪なのかどうかでさえ疑わしいケースなのに、若き同朋を最初から〇×容疑者として、これでもかと言うほどセンセーショナルに報道していた。えげつないボスやアメリカ当局の言い分を無批判に受け売りして、初めから犯罪者扱いである。まったく日本のマスコミはレベルが低い。

研究者として最高に幸せな人生を踏み出そうという、希望にみちた第一歩を、最悪の記憶にされてしまった若い人達が気の毒でならない。

これから海外留学を考えている皆さん。ぜひとも真理の探求を愛している本物の研究者の所に行ってください。そのような人は、必ずしも流行の研究をしておらず、論文も大量生産せず、研究室も小規模で、研究費もそこそこかも知れない。でも、あなたのよき船出を支えてくれるのは、本物の研究者とのつき合いです。

*帝京大学薬学部